

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四）

—— 13 明石香 / 18 松風香 ——

矢野環
岩坪健
福田智子

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二）」1 桐壺香 / 6 末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三）」7 紅葉賀香から12 須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年5月）の続編として、13 明石香から18 松風香までの六つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通常の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、

「（朱）」と示し、一面の終わりには「」を付して丁数を記す。

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。

一、巻末には影印を付す。

13 明石香

【翻刻】

△明石香

秋の夜の月毛の駒よわがこふる

雲井にかけれ時の間も見ん

試なし。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三の香、各三包、客香一包、都合十包拵へ、其内一二三各二包充と、客香一包と合せて七包を出香として」四三ウ又残一二三各一包を打交、其内より一包取て迎船と名付て直し置く（餘二包は不用）。扱て出香七包、一炷充焚出し、七炷皆終て香の包紙を開き、記録の点も添て後に、迎船の一炷を焚出す也。

一 出香七包の間様は、無試十炷香の通りに札を打べし。記録点も、同香二炷充、上下にて結たるを中りとする也。

一 七包焚終り、記録点も添て後に、迎船の一包を焚出す。初七炷の内の間に合せて札を打べし。此香聞違」四三オたるは、初七包皆中たりとも点を除け、無点とする。是大事の一炷也。考て聞べし。点は、独聞五点、二人は四点、三人より三点充也。違たるは何人にも星三つ充附る。記録には七炷の内、同香の出所によつて左の名目を朱にて認るべし。

- 一 二（朱）宮ばしら
- 一 三（朱）しらぬ雲井
- 一 四（朱）琴
- 一 五（朱）琵琶
- 一 六（朱）追風
- 一 七（朱）浦つたへ」四三ウ
- 二 三（朱）おかへの宿（宿）
- 二 四（朱）名残の袖

二五（朱）草の枕

二七（朱）むつごと

三五（朱）みるめ

三七（朱）月毛の駒

四六（朱）盡せぬ閨

五六（朱）旅ごろも

六七（朱）わたつ海

右の通に間を認る。假令、迎船の香は一炷目二炷目と同香なりと聞は、宮ばしらと認る。又二炷目五炷目と同香なりと聞は、草の枕と認る也。

一 七炷の内にて、客独聞三点、二人より二点充、地香独聞二点、二人より一点充也。聞違ても星はなし。七炷の内にて、迎船と同香の中り数によつて、聞の下に左の」四四ウごとく認るべし（迎船の一炷は、数の外なり）。

一 炷中り 入道と書

二 炷中り 明石上と書

三 炷中り 源氏と書

皆不中は 左遷と書

但し客を加て三炷也。

右の通也。七炷の内は、迎船の一炷と結ざるは中りに非らず。

又迎船不中して客香斗り中たるは、此数にならず。

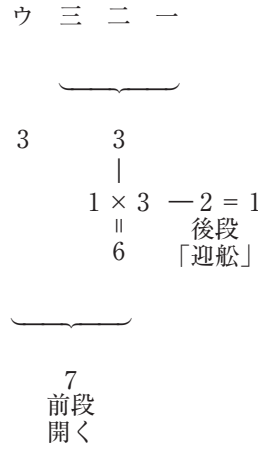
記録認様左に記す（一炷二炷三炷と中りの数の定様見合）」四四オ

明石香之記

〔表〕 四五ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



地香「一」「二」「三」を三包ずつと客香一包、計十包を用意する。試香はない。本香は、前段と後段に分かれる。前段には、「一」「二」「三」の香を二包ずつ六包と客香一包の計七包を用いる。後段では、残りの「一」「二」「三」の香、一包ずつ計三包の中から、一包を取り出し、「迎船」と名付ける。余りの二包は用いない。

前段は、一炷聞きとする。答え方は、無試十炷香と同様に、出香の順に「一」「二」「三」「ウ」の十炷香札を打つ。すべて打ち終えた後に、香の包紙を開き、正答を披露し、ここで点も記録する。同香を二炷ともに聞き当てなければ点にならない。客香

は独り聞き三点、二人以上は二点、地香は、独り聞き二点、二人以上は一点である。聞き違えても星は付けない。

次に、後段に入る。「迎船」一炷を焚く。前段の答えに合わせ、同香の札を打つ。もし、これを聞き違えた場合は、前段の得点がなくなる（大事の一炷）。後段の得点は、独り聞き五点、二人は四点、三人以上は三点である。聞き違えは、何人いても星を三つ付す。記録には、「迎船」と同香が、前段七炷のうち何炷目に出たかにより、聞きの名目を朱で記す。順列組合せにより、全部で二十一の名目がある（翻刻参照）。

記録にはさらに、前段で「迎船」と同香を聞き当てた数（「迎船」一炷は除外。前段の数のみ）により、先の聞きの名目の下に、「入道」（一炷）、「明石上」（二炷）、「左遷」（すべて聞き違え）と記す。また、「迎船」と同香二炷に加え、客香一炷も聞き当てた場合は、「源氏」と記録する。

蘭之園本では、地香「一」「二」「三」を四包ずつと客香二包を用意し、それらを均等に二つに分け、「前六種」「後六種」の前段・後段で用いる。方法は、地香「一」「二」「三」を二包ずつ、計六包から一包を除き、客香一包を加えて、全六包の二炷聞きで札を打つ。これを前段と後段で二回繰り返す。聞きの名目は全部で十二あるが、客香が出た場合は、二炷のうちの前後は問わず、ひとつの名目にまとめられている。その「源氏」「明

石上」「入道」という名目は、竹幽本では、記録の最下段に記されることになっている。また、竹幽本で「大事の一炷」とされる「迎船」は、蘭之園本では聞きの名目のひとつである。残りの「追風」「浦づたへ」「琴」「おかべの宿」「琵琶」「月毛の駒」「只ならぬ身」「三とせの別」は、すべて竹幽本も同様に用いている。竹幽本独自の名目は、「宮ばしら」「しらぬ雲井」「名残の袖」「草の枕」「むつごと」「おち近」「みるめ」「宿のこずへ」「浮世の夢」「盡せぬ閨」「秋の夜」「旅ごろも」「わたつ海」である。蘭之園本が、全六包の二炷開きの繰り返しであるのに対し、竹幽本は、無試十炷香を基本としながらも、前段と後段の構成が全く異なり、複雑なものになっている。

(2) 『源氏物語』との関わり

竹幽本の名目は「迎船」も含めると、二十六にも及ぶ。そのうち蘭之園本と共通するのは次の十二である。

迎船・琴・琵琶・追風・浦づたへ・おかへの宿・只ならぬ身・月毛の駒・三とせの別・入道・明石上・源氏

このうち傍線を付した五つの名目は、『源氏物語』本文には出てこない。だが、『源氏小鏡』には、「只ならぬ身」以外の四つの名目が見られる。また、「只ならぬ身」も『源氏小鏡』の「この

むすめ六月のころより、た、ならずなりたり」に拠って作られたものであろう。

蘭之園本の名目は前掲の十二しかないので、竹幽本はそれら全部を採用して、さらに十四も加えたことになる。追加されたものはみな、『源氏小鏡』には見当たらない。このうち十二の名目は『源氏物語』本文に存し、残りは「盡せぬ閨」「左遷」だけである。ただし「盡せぬ閨」は、次の和歌の誤写か誤読によるものかもしれない。

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけてし
のばん(二六六頁)⁽²⁾

第四句「つきせぬねにや」を「つきせぬねやに」と見誤れば、「つきせぬ閨」となる。ともあれ竹幽本は、『源氏物語』から名目になる言葉を探したと推定される。また、「左遷」という言葉は、物語には使われていない。現代の理解でも、源氏は左遷ではなく自ら退去したと考えられている。だが、江戸時代に流布した版本『源氏物語湖月抄』の「年立」(年譜)を見ると、須磨の巻に「源氏ノ君、左遷ノ定メ有ル事」と記されている。本組香は、この捉え方に拠っている。

竹幽本の名目をすべて用いて、須磨の巻のあらすじを記すと、

以下のようになる。なお名目には傍線を付した。

須磨に左遷された源氏は、明石の入道が用意した迎え船に乗り、追風に吹かれて明石に到着した。入道の娘である明石の上は岡辺の宿（二三四頁）に住み、源氏は浜辺の館に落ち着いた。源氏は京都に残した紫の上に手紙を書き、次の和歌を送った。

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦つたひ
して（二三六頁）

あるとき源氏が琴（二四〇頁）を弾くと、入道は琵琶（二四一頁）を奏でた。入道は源氏に娘のことを話し、源氏は和歌で答えた。

旅衣うらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず
（二四七頁）

源氏は明石の上に、次の和歌を送り求婚した。

をちこちも知らぬ雲居にながめわびかすめし宿の梢をぞと
ふ（二四八頁）

源氏は馬に乗り、明石の上を訪れる途中、

秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居を③かけれ時のまも見
ん（二五五頁）

と詠み、紫の上を偲んだ。そのあと源氏は明石の上に会い、和歌を詠んだ。

むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむ
やと（二五七頁）

やがて明石の上は懐妊して、ただならぬ身になった。そのことを源氏は都にいる紫の上に知らせた。

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさ
びなれども（二五九頁）

源氏は帰京することになり、都から持ってきた琴を明石の上に贈り、明石の上は和歌で返した。

なほざりに頼めおくめる④ことをつきせぬ音にやかけてし

のばん (二六六頁)

源氏は内裏に参り、帝と和歌を詠み交わした。

わたつ海にしなえうらぶれ蛭の子の脚立たざりし年はへに
けり (二七四頁)

蛭の子は生まれて三歳になっても立てなかった、という故事を踏まえて、源氏は須磨・明石に足掛け三年いたことを詠んだ。それに対して帝は、

宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春の恨み残すな
(二七四頁)

という歌を詠み、三とせの別れを恨まないように、と返した。源氏が須磨にいたとき、船で通り過ぎた女性から和歌が送られ、源氏は次のように返した。

かへりてはかごとやせまし寄せたりしなごりに袖のひがた
かりしを (二七六頁)

名目「なごりの袖」は、この歌の第四句「なごりに袖」からくるものである。

14 濡標香

【翻刻】

△濡標香

かずならてなにはのこともかひなきに

などみをつくし思ひそめけん

一 二炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 二炷開の内初の香を住と号、後の香を吉と号、二炷にて住吉といふ。

一 二三客の香、各三包充、都合十二包を打交、二包四六才除け、残十包を二包充焚出すべし地香外に垢、試有。客香試なし。

一 光源氏方五人、明石上方五人と分つ源氏方上座也。

一 立物の進は、香二炷聞て進む。住吉と聞は幾人にてとも一間

充進む。住斗か吉斗か一炷聞たるには進まず記録には片。中も記す。客香地

香の間に間数の差別なし。

一 一組五人の内にて三人ははづれ、残二人の内一人は住の香

聞、一人は吉の香聞は、二炷中りに成りて一間進也。住く

とか吉くとの四六ウ聞にては二炷中りには成らず。假令、

一組五人の内にて

一人住吉中り 一間
 一人住吉中り 一間
 一人吉中り
 一人吉中り
 一人住中り 二間
 以上三間の進也。
 此餘皆是に等し。

- 一 車早く進みて十六間目に至れば、初の勝とす。四七オ 但し、假目より置に、十六間を越て十七間目に至る時、進越は捨にして、是非十六間目に止るべし。其所に車を留て、其後は香中りても進まず。船の十六間目に来るを待合て、十六間目に船来ると短尺を船に渡し、車を一間進すべし。
- 一 船早く十六間目に至らば、初の勝として車の来るを待合せ、短冊を渡す次第、右に同じ。船も是非十六間目に止るべし。
- 一 車船一同に十六間目に至らば、互に短冊を取かわす。四七ウべし。
- 一 双方ともに十六間目に至て、後の勝負を第一とする也。是より双方の内、住吉の鳥居の内に早く至るを勝として、鳥居に着ば、香は終らずとも盤は納る也。
 初の勝の人、鳥居に早く至れば勝に定むる。
 初の負の人、鳥居に早く至れば双方持と成也。
 記録は中り斗をしるす。認様左のごとし。四八オ

滌標香之記

〔表〕 四八ウ

滌標香立物圖

〔図〕 四九オ

〔図〕 四九ウ

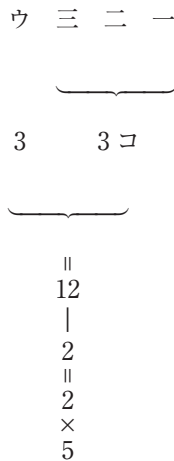
同盤之圖

豎溝二筋 横界二十一間

〔図〕 五〇オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 地香「一」「二」「三」と客香を三包ずつ、計十二包を用意する（地香は、これとは別に試香として各一包が必要である）。この十二包から二包を除き、十包として、二炷聞きで十炷香札を打つ盤物である。

連衆は、光源氏方（上座）と明石上方、五人ずつに分かれ、御所車（光源氏方）と櫻船（明石上方）を、住吉の鳥居の方向へ進めていく。二炷のうち「初の香」（初めに出た香）を「住」、

「後の香」（後に出た香）を「吉」と呼び、二炷聞き当てると、一問ずつ進む。客香・地香の区別や独り聞き[※]の優遇はなく、一人聞き当てれば一問進めていく。記録には、当たりだけを記し、聞き違いは記さない。「片中（かたあたり。いずれか片方を聞き当てること）」の場合は、記録には記すが、車・船を進めることはできない。ただし、光源氏方、明石上方、それぞれに、身方が「住」「吉」いずれか片方を聞き当て、「住」「吉」の組合せができた場合は、ひとりで二炷聞き当てた時と同じく、一問進むことができる。なお、「住」「住」あるいは「吉」「吉」では進めない。

十六問目に早く着いた方を、「初の勝」（初めの勝負の勝ち）とする。もし、十六問目を越えて進むことができる状況であっても、十六問目で止まる。その後は、相手方が進んでくるのを待ち、香を聞き当てても車・船を進めない。相手方が進んで来たら、短冊を渡した上で、一問進む。双方同時に十六問目に行き着いた場合は、互いに短冊を取り交わす。

十六問目以降は、住吉の鳥居に早く着いた方を勝ちとする。いずれかが鳥居に着いたら、香は終わらなくても盤上の勝負を終える。「初の負」（初めの勝負の負け）の方が早く着いた場合は、「持」（引き分け）となる。

蘭之園本は、竹幽本とほぼ同内容である。竹幽本が、蘭之園

本をそのまま踏襲したのであろう。わずかに、竹幽本が、「初の負」が後の勝負で勝った場合を「持」とすると明記したところに差異が見られる。

(2) 『源氏物語』との関わり

前項で述べたとおり、竹幽本は蘭之園本とほぼ同じ内容をもっている。組香の名目も同じである。そこで以下、それらの名目を竹幽本から抜き出してみる。

住吉・光源氏・明石上・車・船・短冊・短尺・住吉の鳥居・

岸姫松・難波芦・御所車・楼船・住吉鳥居・瑞籬

右に列挙した名目のうち、『源氏物語』本文にみられないものは傍線を付した。物語では源氏は「御車」、明石の君は「舟」で住吉に参詣したとあり、本組香ではそれらの美称「御所車」「楼船」を用いたと考えられる。また、「鳥居」はこの場面を取り上げた源氏物語絵には必ず描かれ、神社の周りの垣根を指す「瑞籬」（瑞垣）も社に欠かせない。さらに、「岸姫松」は、「松」ならば物語にも見いだせるが、その語句自体は物語には出て来ない。だが、「岸姫松」は、たとえば、「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ経ぬらん」（伊勢物語・百十七段）にも見られる歌語であり、「住吉」という土地と関わりの深い景物であ

る。同様に「難波芦」も、物語には出て来ないけれども、「津の国の難波の芦のめもはるにしげきわが恋人知るらめや」（古今集・卷十二・恋歌二・六〇四・紀貫之）などに詠まれた、「住吉」のある摂津国の難波の景物として名高い。これらの名目は、物語には直接描かれないが、源氏絵や、和歌に詠まれる「住吉」のイメージから採り入れたものであろう。

なお、「滯標香立物図」に記された「光源氏方歌」（三〇六頁）と「明石上方歌」（三〇七頁）は二人の贈答歌で、後者は卷名歌でもある。光源氏が明石の君に送った「光源氏方歌」は、物語本文では「畳紙」（三〇六頁）に書かれたが、蘭之園本・竹幽本ともに「短冊」（「短尺」）になっている。盤物として、便宜上変更したのであろう。

15 蓬生香

【翻刻】

△蓬生香

たつねてもわれこそとはめ道もなく

ふかき蓬のもとをの心を

一 十炷香の札を用ゆ。

一 蓬の香三包、葎の香三包、露の香五包、都合十一包出香とし、皆焚終りて後に包紙を開くべし。

一 蓬の香、葎の香、外に拵へ試に出す。露の香は客故」五〇ウ
試なし。

一 露の香、陽数七三五に出たるを聞中るを第一とす。

一 札の打様左のごとし。

蓬に 一ノ札 葎に 二ノ札

露に 三ノ札 二枚と打べし。

一 記録点は、独聞の差別なく、露の香五包の内にて陽数一と三とに出るを聞は、三の方二点にて、都合」五一オ二点也。又、一と五に出るを聞は、五の方二点にて、都合三点也。又、一三五と三炷中れば、皆二点充にして六点に成也。四炷五炷中り、皆二点充に成るべし。又、陰数二四と聞は一点充、陰数の中りは皆一点充也。又、一と二、或は四五と陰陽交て聞時は、是も皆一点充、蓬葎は独聞の差別なく何人にても一点充也。

認様左のごとし。」五一ウ

蓬生香之記

〔表〕」五二オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

蓬	}	コ
律	}	3
露	}	5
}		
11		

地香「蓬」^{*}「律」三包ずつと客香「露」五包（すべて同香^{*}）の計十一包を用意する。これとは別に、地香のみ試香^{*}を行う。一炷^{*}聞きで、答えは十炷^{*}香札を打つ。「蓬」に「一」、「律」に「二」をあて、「露」五包には「ウ」三枚と「三」二枚を割り当てる。十一包すべてを焚き終わった後、香の包紙を開き、正答を披露^{*}する。

記録点は、独り^{*}聞き^{*}の加算はない。地香「蓬」「律」は一点。「露」は、全五包が何炷^{*}目に出たかにより、点数が異なる。すなわち、陰数回（二・四・六・八・十炷^{*}目）に出た場合は、地香と同じく一点ずつであり、陽数回（三・五・七・九・十一炷^{*}目）に出た場合でも、聞き当てたのが一つのみだと一点だが、陽数回の香を二つ聞き当てると、後者の香を二点として計三点、三つ以上聞き当てると各二点となる。「香之記」の最下段には、すべて聞き当てた場合は「皆」、その他は点数を記す。

蘭之園本は、地香を「蓬」「律」三包ずつ用意し、他に試香を出すという点では、竹幽本と同じである。だが、客香「露」が

一包のみという点で異なっている。また、地香六包から一包を除き、その一包を「初香」（初めてに焚く香）として「露弘」と名付けて一炷^{*}聞きにし、さらに、残り五包の地香に客香一包を加えた六包を二炷^{*}聞きにして、「香之記」に聞き^{*}の名目（「よもぎふ」「道もなく」「むぐらふ」「あれたる宿」「むち」「露」の六つ）を記すという方法も、竹幽本と一線を画す。竹幽本が、これらの名目を用いなかったのは、「蓬」「律」「露」といった香の名称との重複を避けたものか。竹幽本には、「露」の香が五包と比較的^{*}多く、出香の順序の陰数・陽数によって点数を定めるといった「露」に焦点を絞った組香の作り替えの跡が窺える。

(2) 『源氏物語』との関わり

竹幽本が用いた『源氏物語』関連の語は、わずかに「蓬」「律」「露」だけであるが、末摘花邸のイメージを端的に表す語のみをシンプルに選んだものとも捉えられる。

明石から帰京した光源氏は、末摘花のことを忘れていたが、蓬生巻において、たまたまその家のそばを通りかかり、訪れることにする。末摘花邸のありさまは、「しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。律は西東の御門を閉ち籠めたる」（三二九頁）という状態であった。源氏が訪問した時には、惟光の「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ入らせたまふべき」（三四八頁）という言葉からも知られ

るように、たいそう露が置いていた。それを家来が馬の鞭で払いながら源氏を通した。そのとき源氏が詠んだ和歌が、卷名歌（三四八頁）である。竹幽本が、本香十一包のうち五包を「露の香」とするのは、「蓬」「葎」の繁る荒れた邸のイメージの上に、その露深さを強調したもののか。

なお、蘭之園本は「よもぎふ」「むぐらふ」と「露」のほか、「道もなく」「あれたる宿」「むち」が加わる。このうち物語に見られないものは「むぐらふ」と「あれたる宿」である。

「むぐらふ」は、古くは『万葉集』に「いかならむ時にか妹をむぐらふの汚なきやどに入れいませむ」（巻四・七五九）と詠まれており、物語中に見える「葎」から、「蓬生」に対応する言葉として「葎生」という語が採り入れられたのであろう。

一方、「あれたる宿」は『源氏小鏡』に見いだせる。物語中では「荒れたる家」（三四四頁）とあるが、本組香では、「をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば」（古今集・秋上・二三七・兼覧王・ものへまかりけるに、人の家のをみなへしうゑたりけるを見てよめる）をはじめ、和歌にも詠まれる洗練された歌語を採用している。

16 関屋香

【翻刻】

△関屋香

あふさかのせきやいかなるせきなれば

しげきなけきの中をわくらん

一 一炷開。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 組合聞也 二人充四組
二入充四組
開頭

一 一二三客香、各三包、都合十二包打交、内二包除け 五二ウ

残十包出香とす 地香外に
推へ試看。

一 源氏君方五人、伊豫介方五人と分つ 源氏君方上座なるべし。
双方に開頭あり

一 伊豫介人形は開頭の持也。舍人と仕丁は人形一つに二人充組合すべし。

一 人形進は、独聞の差別なく、地香一間、客香二間充進べし。

馬上の人形は聞の一倍増にて一炷聞は二間充進也 舍人仕丁の内
には二組人形と

もに地香中は
二間客香中は 五三才 四間進むと。
心得べし。

一 一方、舍人人形二つとも十間目に一同に至ると、関にさへられて一香よどむ也。其時、馬上の人形行越えて二間隔ば、跡へ戻して一間隔るよふにすべし。若又、舍人二つの内、一つにても関を越ば、よどみなし。都て馬上の人形はよどみなし。

一 馬上も舍人と互に助け合て行べし。假令」五三ウ

舍人 一人中 一間

馬上 中 一間 二間進善なれとも舍人に助を付たる故二間なり

舍人 一人外 一間 馬上より助られ一問進なり

舍人 一人中 二間

馬上 外 一間 舍人より助られ一問進む也

舍人 一人中 一間 二間進善なれとも馬上に助を付たる故二間なり

凡右のことし。馬上と舍人との間、一間おくれはくるし」
五四オ ならず。二間違ふと互に助を付て進むべし。

一 馬上の人形、十一問目の関に至ると、門の柱に短冊をかくる也 源氏方案。伊豫方銀。是を初の勝とす。おくれたる馬上の人形も

十一問目に至れば、短尺をかくるべし。

一 双方、馬上の人形、五間おくれると、負し方、下馬して追付まで馬に乗る事なし。

一 双方、馬上人形の内、早く橋に着たるを勝として、香は」
五四ウ 終らずとも盤は納る也。双方共に舍人の方斗橋に着たるは、勝負極らず。馬上人形の着を専にすべし。盤終りて

負たる方の人形は、その所に下馬するべし。

一 一方、三つの人形、関を越て、馬上人形、五問目に至らば、傘の袋をのけて、日傘をさしかける也。

一 記録は中り斗を記す。認様左のことし。」五五オ

関屋香之記

〔表〕 五五ウ

〔表〕 五六オ

関屋香立物圖

〔図〕 五六ウ

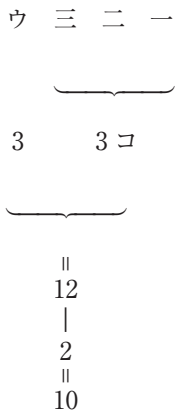
〔図〕 五七オ

同盤之圖 堅溝六筋 横界二十間

〔図〕 五七ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



^{*}地香「一」「二」「三」と客香を三包ずつ、計十二包を用意し、二包を除き、残り十包を本香に用いる。また、これとは別に地香のみ試香を行う。十包の香を一炷開きで聞く。答えには十炷香札を用いる。香之記には、聞き当てた分のみを記す。

連衆を源氏方(上座)五人と伊予介方五人に分け、それぞれ「聞頭」(ききがしら)。グループの代表者)一名を設ける。源氏

方の「聞頭」は、源氏人形を持ち、残りの四名は、舍人人形二体（太刀持・傘持）に二名ずつ付く。同様に、伊予介方の「聞頭」は、伊予介人形を持ち、残りの四名は、仕丁人形二体（このうち傘持一体）に二名ずつ付く。源氏人形と伊予介人形は、源氏・伊予介が馬に乗った姿であり、これに舍人・仕丁の人形が徒歩で供奉する体裁である。

「聞頭」以外は、地香を聞き当てれば一間、客香だと二間進むが、「聞頭」は、その二倍進むことができる。舍人・仕丁の人形には、一体に二名ずつ付いているが、聞き当てた点数の合計分、人形を進めていく。

舍人（仕丁）人形が、二体とも十間目（関の手前）に止まった場合は、関に遮られたと見て、香を聞くのを一回休む。この時、馬上人形（聞頭）が二間先に進んでいた場合は、舍人（仕丁）人形と二間隔てた場所に戻る。舍人（仕丁）人形二体のうち、どちらかが先に関を越えたならば、この問題は生じない。

このように、馬上人形と舍人（仕丁）人形とは、二間以上隔たらないように、助け合って進んで行く必要がある。たとえば、「聞頭」が聞き当て、舍人人形に付く四名のうち一名しか聞き当てなかった場合は、馬上人形は二間進めるはずだが、一間のみ進み、残りの一間分は、二名ともに聞き当てられなかった舍人人形一体を二間進めるのに充てる。もう一方の舍人人形は、一

名が聞き当てているので、人形三体がみな一間ずつ進むことになる。また、「聞頭」が聞き違い、舍人人形に付く四名がみな聞き当てた場合は、舍人人形二体が二間進めるはずだが、このうち一間分を馬上人形が進む分に充て、馬上人形と舍人人形一体は一間ずつ、もう一体の舍人人形は二間進む。

馬上人形は、十一間目の関に達したら、門の柱に、源氏方は金、伊予介方は銀の短冊を掛ける（初の勝）。遅れて来た方も同様である。

三体の人形が関を越え、馬上人形が、さらに五間目に到達したら、傘持は傘袋から日傘を取り出し、差し掛ける。

源氏方と伊予介方で競いながら、馬上人形が相手方より五間遅れた場合は、負けた方の馬上人形は馬から下り、追いつくまで馬に乗れない。

馬上人形が、早く橋に着いた方が勝ちである。香が終わらなくても、これをもって盤の勝負を終える。舍人・仕丁人形だけが橋に着いても、勝負は決まらない。負けた方の馬上人形は、その場で馬から下りる。

蘭之園本では、盤物と盤を用いないものとの、二種類の「関屋香」が掲載されている。竹幽本は、この盤物に近い。十包の一炷開きという点や、源氏方・伊予介方に分ける点、さらに、人形の構成や進め方など、組香の方法としては、ほぼ踏襲してい

ると言っているであろう。とくに人形の進め方の具体例は、まったく同じ事例を採り上げて説明している。ただし、蘭之園本では、馬上人形二体をいずれも「香大将の持」とするが、竹幽本は、その名の代わりに「聞頭」と記す。この語は香道の専門用語としても珍しい。また、供奉する人形は、蘭之園本では、源氏方・伊予介方ともに「舍人」であるが、竹幽本は、源氏方を「舍人」、伊予介方を「仕丁」と区別する。もともと組香の説明が進むにつれ、「仕丁」をも「舍人」とする書かれ方になってはいるが、「伊予介」に「舍人」が供奉するのは不自然だといった判断があったのではないか。なお、竹幽本に見られる、馬上人形が下馬するという趣向も、蘭之園本にはないものである。

(2) 『源氏物語』との関わり

物語は、都から石山寺に詣でる光源氏の一行と、帰京する伊予介の一族とが、逢坂の関ですれ違う場面である。だが、「舍人」や「仕丁」の語は見られず、また、山城の「白川橋」も近江の「瀬田橋」も出てこない。実際の石山詣の行程を組香に盛り込んだものであるう。

逢坂の関で源氏は、伊予介の妻である空蟬に和歌を送るが、その返歌が巻名歌（三六三頁）である。物語では何に記したかまでは述べていないが、盤物では「短冊」を交わす。「短冊」は、先の漆標香でも用いられている。

なお、蘭之園本では関屋香・蓬生香の順に組香が配置されているのに対し、竹幽本は逆になっている。蘭之園本は、『源氏小鏡』と同じ順序であり、武居雅子氏が指摘されたように、『源氏小鏡』に依拠したものと推察される⁽⁴⁾。一方、竹幽本は、たとえば江戸時代に流布した『源氏物語湖月抄』と同じである点に留意される。

17 絵合香

【翻刻】

△絵合香

うきめ見しそのおりよりもけふは又

過にし方にかへるなみだか

一 一炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 梅壺方五人、弘徽殿方五人と分つ 梅壺方上座也。双方聞頭名立るべし。

一 一二三客の香、各三包、都合十二包の内、二包除け、残

五八才十包出香とす 地香外に指。試に出す。

一 人形進は、独聞差別なく、地香一間、客香二間充進む也。両聞頭の内、二炷充の續聞有れば、向の繪を一枚取る也。双方持の時は、繪の沙汰なし 二炷續く毎に繪一枚充取る故に、四炷續。は繪二枚六炷續は繪三枚とると心得へし。 又聞頭の内にて三炷續で聞違たらば相手の聞数に構はず、繪を一枚

向ふに渡すべし相手のあたり中らざるに構なし。女官八人は、三炷充の續聞の時斗、相手の絵を一枚取る也。」五八ウ聞違に繪を渡す事なし。是も双方持の時は構なし。

一 双方十人共に地香の独聞には、相手の繪一枚取る。客香独聞の時は二枚取る也。

一 聞頭の人形、十間目の翠簾の際に至れば、翠簾を其方向へ、卷あぐるべし。是にて勝とす。しかれとも繪の取り残りあらば、勝負は付ず。十枚の繪を不残取盡せば」五九オ香は終らずとも、盤の勝負は終る也。十間目迄に至る方よりおくれたる方、繪を多く取て、取盡たらは、双方持と成べし。又官女人形は、十間目に至りても、聞頭の勝負付ざる内は、勝負付べからず。又聞頭の勝負付ば、官女の方は繪を取盡さずとも、盤は納るべし。

一 記録は中り斗を認る也。認様左のごとし。」五九ウ

繪合香之記

〔表〕 六〇オ

繪合香立物圖

〔図〕 六〇ウ

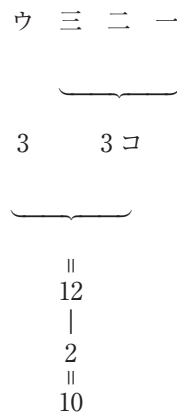
〔図〕 六一オ

同盤之圖 豎溝五筋 横界二十間

〔図〕 六一ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



地香「一」「二」「三」と客香を三包ずつ、計十二包を用意し、二包を除き、残り十包を本香に用いる。また、これとは別に地香のみ試香を行う。十包の香を一炷開きで聞く。答えには十炷香札を用いる。『香之記』には、聞き当てた分のみを記す。

連衆を梅壺方（上座）五人と弘徽殿方五人に分け、それぞれ「聞頭」一名を設ける。「聞頭」は梅壺女御人形・弘徽殿女御人形を持ち、その他の連衆は、女官人形に一人一体ずつ付く。人形は、盤の中央に立てられた翠簾に向かって、盤の端から向かい合つて進むように配置する。また、絵（色紙）十枚を、それぞれ「聞頭」の人形の前に置いておく。人形を進める際には、独り聞きの違いなく、地香は一問、客香は二問進む。

「聞頭」の「続聞」（つづげぎき）。二炷以上続けて聞き当てること）は、相手方の絵を取ることが出来る。二炷続けば一枚、四炷続けば二枚、六炷続けば三枚という要領である。「聞頭」の

「続聞」が、双方で同じように起こった場合は、引き分けということ、絵のやりとりはない。また、「聞頭」が三炷続けて聞き違えた時は、相手の聞き当てた数に関わりなく、絵を相手方に一枚渡す。

女官人形は、三炷の「続聞」の場合のみ、相手方の絵を一枚取ることができる。聞き違えて相手方に絵を渡すことはない。女官人形の場合も、双方引き分けの時は、絵のやりとりはない。

なお、地香の独り聞きは、「聞頭」かその他の連衆かに関わらず、相手方の絵を一枚取ることができる。客香の独り聞きでは二枚取る。

「聞頭」の人形が十間目の翠簾の前まで来たら、翠簾をその人形の方に向けて巻き上げる。この時、相手方の十枚の絵をすべて取っていけば、香は終わっていなくても勝ちとなり、盤の勝負は終了となる。だがもし、相手方の絵の取り残しがあれば、まだ勝負は決まらない。また、「聞頭」の人形が十間目に至らなくても、相手方から絵を多く取っていた場合は、「持」（引き分け）である。官女人形は、たとえ十間目に進んでも、「聞頭」の勝負が決まっていない時は、勝負を継続する。「聞頭」の勝負が決まれば、官女人形が相手方の絵をすべて取っていなくても、盤の勝負を終える。

蘭之園本は、以上の竹幽本の方法とほぼ同じである。組香の

方法としては、竹幽本は蘭之園本を踏襲している。だが、竹幽本の「聞頭」を、蘭之園本では「香大将」とするという対立は、先の「関屋香」の場合と同様に、この「総合香」でも見受けられる。また、絵について、蘭之園本は「絵の大サ寸法あり。うらはのこらず金ばく（箔）」とするのに対し、竹幽本は、絵（色紙）の寸法を「幅一寸八分、縦三寸二分」と定め、裏は梅壺方は金、弘徽殿方は銀に分けるなど、指示の具体化や微細な工夫の跡が見られる。なお、蘭之園本の記録点は、独り聞きや地香・客香の区別をしており、独り聞きや客香の二人聞きでも、相手方から絵を取ることができる。これらの点は、竹幽本においてはとくに言及されていない。

（2）『源氏物語』との関わり

政界に復帰した光源氏は、自らの権力を固めるため、二十三歳の養女を梅壺女御として入内させた。十三歳になった冷泉帝には、すでに一歳年上の弘徽殿女御がおり、相思相愛の仲であった。しかしながら絵を好む帝の寵愛は次第に、絵を描くのが上手な梅壺女御へ移っていった。そこで弘徽殿女御の父親は、優れた絵を次々と制作させて、帝の気を引こうとした。源氏も対抗して、秘蔵していた多くの絵巻物を取り出し、紫の上と一緒に選んだ。その中には、源氏が須磨・明石で描いた絵日記も入っていた。それを久しぶりに見た源氏が詠んだ和歌が、巻名歌

（三七八頁）である。

二人の女御が一点ずつ絵を出し、それぞれの女房たちが批評して優劣を競う絵合が開かれ、国母である藤壺も臨席した。蘭之園本では、藤壺と梅壺の人形が登場して勝負する。しかし竹幽本では物語の内容に合わせて、梅壺と弘徽殿の人形に変更されている。

梅壺方の色紙には、須磨の里と明石の浦が描かれ、それは源氏が用意した絵日記を表わす。一方、弘徽殿方（蘭之園本では藤壺方）の色紙絵は、吉野山の桜と竜田川の紅葉で、いずれも和歌によく詠まれ、春秋の自然美を象徴したものである。

18 松風香

【翻刻】

△松風香

身をかへてひとりかへれる山里に

聞しに似たる忝風ぞ吹

一 名乗紙にて聞くべし。

一 上の句の香三包、下の句の香四包一壺別香、都合七包打交、其

内二包取除け、残五包出香として皆焚終て後に包紙を開く

べし。】六二オ

一 上の句の香、外に拵へ、試に出す。下の句の香は試なし。

一 連中は間に随ひ、上の句とか下の句とか認て出すを、記録にて哥を書く也。

一 記録認様

御製 源氏君 明石上 頭中将 右大辨

右の名を此順に始より香本に認置て聞に「六二ウ随ひ、其詠哥の上下の句を五文字充認むる。假令は、初炷ならば、上の句と聞ば、月のすむと書、下の句と聞ば、桂の影と書く。五炷ともに是に準知るべし。

詠哥

冷泉院御製

月のすむ河のをちなる里なれば 桂のかけはのとけか

るらん】六三オ

源氏君

契りしにかわらぬ琴のしらへにて たへぬ心の程をし

りきや

明石上

かわらしと契りし事を頼にて 松のひゞきにねをそへ

しかな

頭中将

浮雲にしばしまがひし月影の すみはつるよぞのどけ

かるべき】六三ウ

右大弁
雲の上のすみかを捨て夜半の月 いづれの谷に影かく
しけん

此五首の上下の句を取て認るべし。

一 一点は独聞五点、二人三点、三人二点、四人より一点充也。

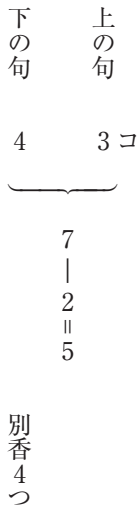
認様左に記す。」六四オ

松風香之記

〔表〕「六四ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



「上の句」の香を同香で三包、「下の句」の香を別香で四包、計七包を用意し、二包を除き、残り五包を本香に用いる。また、これとは別に「上の句」の香のみ試香を行う。連衆は、五包の香について、「上の句」の香か「下の句」の香かを聞き当てる。答えは名乗紙に、五炷を順に「上」*あるいは「下」と記す。

五包の香には、出香の順に一炷目「御製」、二炷目「源氏君」、三炷目「明石上」、四炷目「頭中将」、五炷目「右大辨」という

場の名目がある。これに従って、「香之記」*には、それぞれの登場人物の和歌（翻刻参照）から、「上の句」の香ならば初句を、「下の句」の香ならば第四句を引用する。

記録点は、独り聞き五点、二人は三点、三人は二点、四人から一点である。このように独り聞きの数が高いのは、組香の中でも稀である。「香之記」の最下段には、すべて正答すれば「皆」、それ以外は得点を記す。

蘭之園本は、「山の松風」「川の松風」「古郷の松風」を三包ずつ、計九包を用意し、他に「古郷の松風」のみ試香を行う。一炷聞きで、無試十炷香の要領で「山」と「川」は出香の順に札を打つ。竹幽本は、組香の構成自体が全く異なっており、聞きの名目に初句と第四句しか用いないにも関わらず、冷泉院他の和歌を五句そのまま引用している点に留意される。

(2) 『源氏物語』との関わり

光源氏が明石から帰京した後、明石の君は女子を出産した。源氏はその子を后にするため、都に引き取ろうとした。そこで明石の君は母方の祖先が大堰川のほとりに持っていた山荘に、娘と母を伴い移り住んだ。明石の君の母尼が久々に訪ねた我が家を見て詠んだのが、巻名歌（四〇八頁）である。

そして源氏もまた、この山荘を訪れ、明石の君と三年ぶりに再会し、また娘と初めて対面した。そのとき詠み交わしたのが、

「源氏君」⁽⁵⁾と「明石上」の和歌（四一四頁）である。

その翌日、源氏は嵯峨野に鷹狩りに来ていた宮廷人を、桂の院に招きもてなした。そのとき人々が詠んだ歌が、「頭中将」と「右大弁」の詠作（四二〇・四二二頁）である。冷泉帝からも「冷泉院御製」の和歌（四一九頁）が、桂にいる源氏のもとに送られた。

このように竹幽本は、物語では二つの場面において詠まれた五首の歌を、場面ごとではなく、詠者の身分順、ストーリー展開上、重要な人物の順に、「詠歌」として列挙している。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一部である。

注

(1) 『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）による。

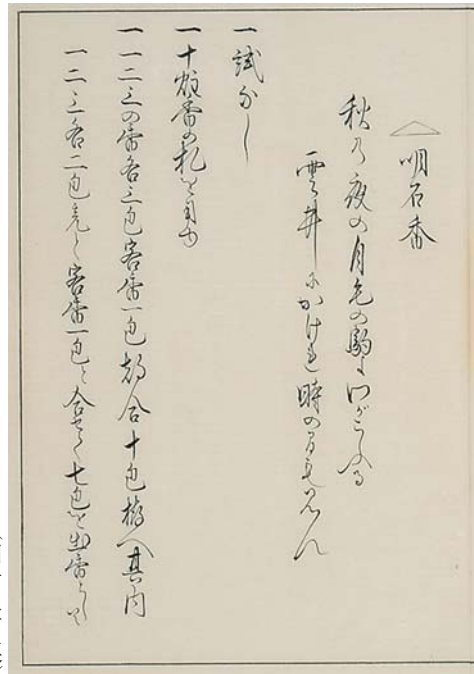
(2) 『源氏物語』の本文は小学館の新編日本古典文学全集により、そのページ数を末尾の（ ）内に付けた。なお、本文には適宜、読みやすいよう手を加えた箇所がある。

(3) 第四句「雲居をかけれ」は、竹幽本では「雲井にかけれ」で、「を」と「に」の助詞が異なる。『源氏物語大成 校異篇』では、青表紙本系統の肖柏本だけが「に」である。近世に流布した版本『源氏物語湖月抄』も「に」であることから、竹幽本も恐らくそこから引用したのではないかと推察される。

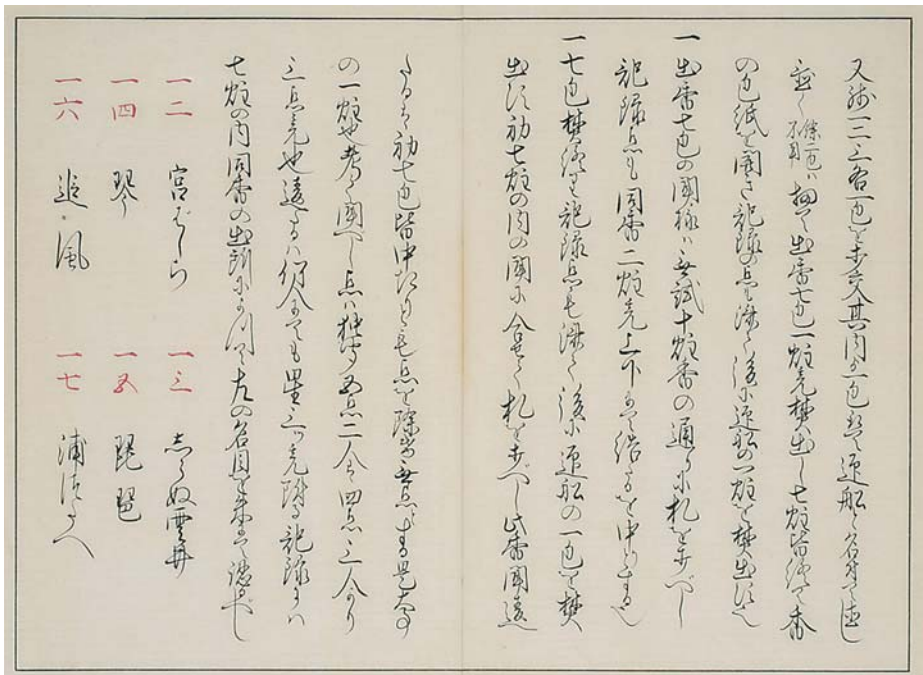
(4) 武居雅子氏『源氏千種香』の依拠本を探る」（総研大文化科学研究）9、二〇一三年三月）。

(5) 竹幽本の結句「程をしりきや」の「程を」は、『源氏物語大成 校異篇』によると青表紙本は「ほとは」、河内本は「ほとを」と対立する。『源氏物語湖月抄』は「ほとを」であるので、竹幽本はそれに拠ったのであろう。

【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



(四十二丁裏)



(四十三丁表)

(四十三丁裏)

二二	おとの窟	二四	名珍の神
二五	草枕枕	二六	只のゆき
二七	む川下	三四	おら道
二八	みる久	三六	宿のこす
二九	自走の駒	四八	流せのま
四六	為世の園	四七	秋の夜
五六	後と流	五七	とせの川

六七 月川海

右と通し國と流の候今運取の香二瓶目二瓶目
 因香あり國と宮とらわ流又二瓶目二瓶目
 右と因香ありと年と草の枕と流と
 一七瓶の内と客独國と二三人と二点と地香種す
 二点一人と一点也國遠てと星と分と七瓶の
 内と運取因香の中と粒とも川國の下の丸の

(四十四丁表)

(四十四丁裏)

一燈中 入道言 二燈中 明石言書
 三燈中 源氏言 皆不中 右運言
 但客加と瓶と

右と通し七瓶の内と運取の二瓶と流との中と非と流
 又運取不中と客席斗の中と付粒ふと流と
 能流流種と流と一燈二瓶二瓶の中の粒の運取と全粒
 と客席國と如と流と考知と

本	一	二	三	ウ	二	三	運取と
名本	一	二	ウ	一	二	三	む川と
名本	一	二	ウ	一	二	三	明石と
名本	一	二	三	ウ	二	三	源氏
名本	一	二	三	ウ	二	三	入道

川

(四十五丁表)

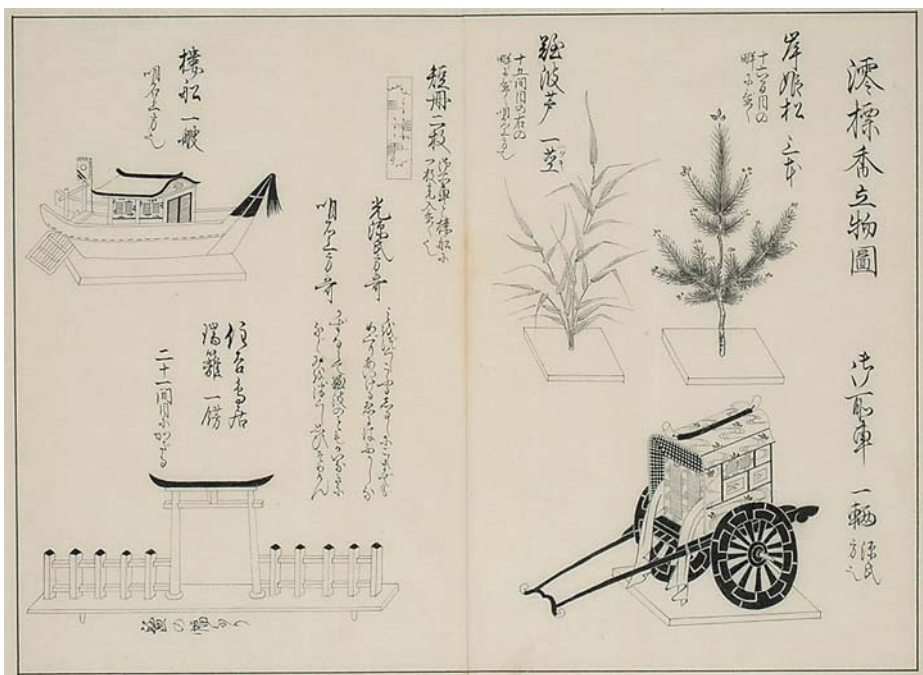
(四十五丁裏)

木		一ウ		二一		三三		ウ二		二二		ウ	
光源氏方		一ウ		二一		三三		ウ二		二二		ウ	
若松	一									ウ			五
出松	一												
菖葵	一	ウ											六
羽石上方		一ウ		二一		三三		ウ二		二二		ウ	
菖菊	一									ウ			六
赤蓮	一	ウ											九
紫菀	一									ウ			九
幸早月		一		二		三		四		五		六	

一 龍源寺中...
 初の後の人多...
 初の負の人多...
 一 龍源寺中...
 一 双方とも小...
 也是より双方...
 一 龍源寺中...
 初の後の人多...
 初の負の人多...
 一 龍源寺中...

(四十八丁裏)

(四十八丁表)



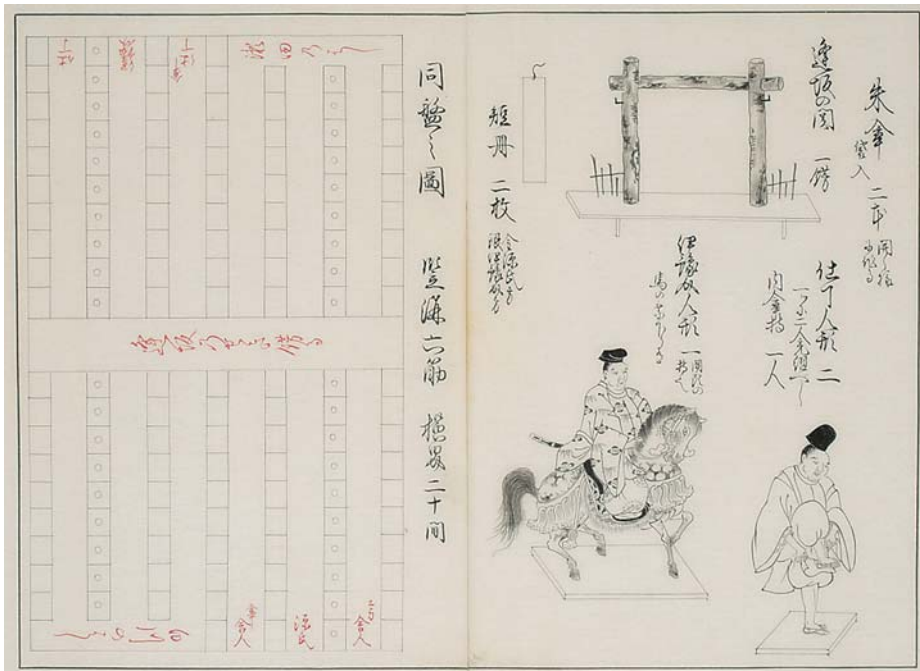
(四十九丁裏)

(四十九丁表)



(五十六丁裏)

(五十六丁表)



(五十七丁裏)

(五十七丁表)

繪合香

くさき先んち 拵れ切りの物も又
色あし ちりちり 之類ありて

一 瓶圍

一 十瓶香の札と別

一 梅壺より人いぬ徽敷より人いぬ 梅壺より二層へ
双層梅壺より

一 一二三の香各二色別合す二色の内二色陸宮御

十色出香 此香外は格
調あり

一 人形進の檀園より列の地香二回寄香二回先進也

一 支園の肉二粒先の續園より列の繪で二枚なり也

一 双も持の厨 繪より妙法 二枚條々 毎枚初先かち原か
四枚條々 繪二枚 條々 繪二枚

一 餅し條又園の肉より二枚條々 四枚條々 繪二枚 條々 繪二枚

一 園の繪 相もの作り
中より小條

一 中官八人 二枚先の續園の厨 相もの絵と二枚あり

(五十八丁表)

(五十八丁裏)

園遠の繪と濃すのぬ 是も双も持の厨
拵

一 双より十人 地盤拵り
相もの繪二枚あり

一 寄香檀園の時 二枚あり

一 園頭の人形十回月の翠簾の跡より列 翠簾と其

方より列 巻つて下 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

一 香と繪 是も持の物なり

(五十九丁表)

(五十九丁裏)

繪合香立物圖

翠簾一傍
十間、二間目の間に置く



楊梅御衣一摺
弘徽殿御衣一摺



女官人形 八
四人先立、四人後立、四人中立、一人御前

繪合香記 一三條

		木		梅壺方			
名	名	名	名	名	名	名	名
若松	玉桂	花菱	燕菊	赤芍	秋萩	秋萩	秋萩
ニ	ニ	一	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
七	六	皆	八	九	五		

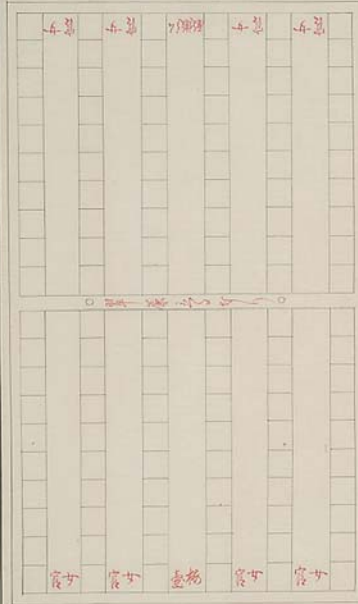
年号月日

(六十丁裏)


(六十丁表)

同種之圖


堅藤五筋 楊梅二十間



楊梅壺十枝




壺の池 五枝 兼全




里の池 五枝 兼全

弘徽殿十枝



川の流 五枝 兼全



山の流 五枝 兼全

(六十一丁裏)

(六十一丁表)

松風香

鹿嶋山鹿嶋山 鹿嶋山

鹿嶋山 鹿嶋山

一 名系紙鹿嶋山 鹿嶋山

一 上の白鹿嶋山 鹿嶋山

七色鹿嶋山 鹿嶋山

皆焚鹿嶋山 鹿嶋山

一 上の白鹿嶋山 鹿嶋山

試鹿嶋山

一 連中鹿嶋山 鹿嶋山

と光鹿嶋山 鹿嶋山

一 鹿嶋山

御製 鹿嶋山

右鹿嶋山 鹿嶋山

(六十二丁表)

(六十二丁裏)

随鹿嶋山 鹿嶋山

候今鹿嶋山 鹿嶋山

小鹿嶋山 鹿嶋山

準鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

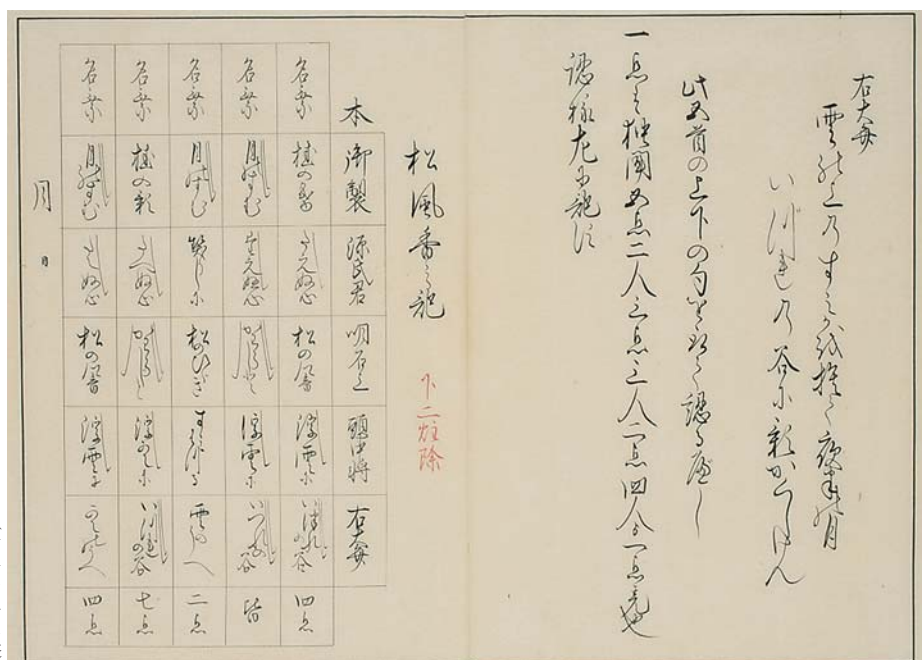
鹿嶋山

鹿嶋山

鹿嶋山

(六十三丁表)

(六十三丁裏)



(六十四丁裏)

(六十四丁表)

